

日本語習得における人間関係の認知と 文化的要因に関する考察 中国人および台湾人留学生を対象として

A Study on the Recognition of Interpersonal Relations and
Cultural Factors in the Learning of Japanese:
Focusing on Chinese and Taiwanese Students

柴 田 庄 一 山 口 和 代*

1. 本研究の目的と意義

箕浦（1990）が文化は意味の体系であって、私たちはその社会特有の意味付けの枠組みで物事を理解していると指摘しているように、通常コミュニケーションのスタイルもまた社会特有の意味体系の中で選択されているものである。したがって、文化を共有する成員同士のコミュニケーションとは異なる問題が、異文化間コミュニケーションの場面では生じることがある。

日本語教師は留学生の日本語習得に重要な役割を担い、日本社会と留学生との橋渡し役としても大きな役目を担っているが、日本語教育の現場では、言語の教育に比べ文化の教育はまだまだ十分に構造化されてはならず、教師が文化教育を行うための訓練や方法論もなお不十分というのが現状である。また、教師自身の異文化理解も各教師の経験、ないしは資質によっている部分があまりにも大きいので、留学生の言語習得および文化理解を促進するためにも、教師の異文化理解への認識を高めることが急務だと考える。それにはまず、留学生のコミュニケーションスタイルの特徴を詳らかにし、その背景にある母国文化や社会の影響を明らかにすることが必須の要件となつてこよう。

本稿においては、中国人および台湾人留学生と日本人を被調査者とした調査データをもとに、言語と社会・文化的要因について考察を加え、従来の日本語教育に欠けていたものは何か、そしてこれからの日本語教育に必要なものは何かについて検討するべく探索型実証研究を行い、言語習得と異文化理解の関係および今後の日本語教育の進むべき方向を探ることを目的とする。

*南山大学総合政策学部 講師

2. 研究の対象と調査方法および分析方法について

本研究では、1995年に行った調査Aとインタビュー調査の2種類と、1998年に行った調査Bとインタビュー調査の2種類をもとに、中国人および台湾人留学生と日本人母語話者のストラテジーと発話スタイルの相違への文化的要因の影響を探った。

調査Aの被調査者の総数は127名、調査Bの被調査者の総数は209名である（表2-1）。

両調査とも、被調査者は機縁法により、愛知県在住の人を中心に、中国人・台湾人留学生と日本人大学院生・社会人を選んだ。被調査者の中国人・台湾人留学生は、当時、大学の学部、あるいは大学院で日本人の学生と共に日本語による授業ないし講義を受けている学生であり、設問を理解するのに十分な日本語力を有している。

ところで人間関係は、均衡が崩れる恐れがある時、あるいは崩れてしまった時には、関係を維持することが難しくなる。今回の調査では、人間関係の均衡をあやうくする可能性のある「依頼」「断り」「謝り」「不満表明」の4タイプの発話行為を中心に場面を設定した。調査項目の内容設定は、日本社会で一般の人々がごく普通に経験する可能性のあるものとし、なるべく不自然な状況設定にならないよう配慮した。

調査Aは、Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz (1990) や生駒・志村 (1993) などの先行研究を参考に人間関係と内容の軽重を組み合わせ、状況設定として24の場面を設定し、談話完成テスト (Discourse Completion Test) を作成して使用した。今回本稿で分析対象としたのはそのうちの16場面 (表2-2, No.1 ~ 16) である。調査Bでは、Olshtain and Weinbach (1993), 初鹿野他 (1996) などの先行研究を参考に人間関係と内容の軽重を組み合わせ、状況設定として12の場面を設定し、談話完成テストを作成して使用したが、本稿の分析に使用したのはそのうちの9場面 (表2-2, No.17 ~ 25) である。

両調査実施後に、調査を補足するため、協力が得られた被調査者に面接形式でインタビュー調査を行った。

調査で収集した発話行為のデータは、日本語表現の特徴を明らかにするために、分析手順として、まず記述式調査である談話完成テストから得られた各発話行為ごとの発話から発話類型 (semantic formulas) を抽出し、意味機能別に分類した。次に、各発話類型

表2-1. 調査Aと調査Bの被調査者の構成

調 査 対 象	調査A			調査B		
	人数	男	女	人数	男	女
中国人留学生	33	19	14	63	30	33
台湾人留学生	17	4	13	42	9	33
日本人社会人	51	15	36	65	27	38
日本人大学院生	26	10	16	39	8	31

の使用頻度と使用順序に焦点を当て、各グループにみられたストラテジー（ある場面における発話で、ある目的を達成するために話し手が使う「発話類型の集合」）の相違を比較して分析を行った。さらに、文末表現で選択された発話類型の形式である発話スタイル（「丁寧体」と「普通体」）を分析の基準として加えることとした。

本稿の表中の表示および分析に際しては、日本人社会人を「日社」、日本人大学院生を「日院」、台湾人被調査者を「台湾」、中国人被調査者を「中国」と表記した。なお、収集したデータのうち、明らかに質問を誤解した回答や無回答は有効回答から除外した。

本稿の分析で使用した場面の番号は表2-2にある番号に該当する。

表2-2. 本稿で取り上げた発話行為の相手と内容

No.	発話行為	相手との関係	発話行為の内容
1	依頼	同・親（友人）	授業で発表するレポートの添削（添削依頼）
2	依頼	同・疎（同級生）	教授に頼まれた資料のコピーの手伝い（助力依頼）
3	依頼	目上（教授）	奨学金応募の推薦書（推薦依頼）
4	依頼	同・親（友人）	自分のクラブの演奏会のチケットの購入（購入依頼）
5	依頼	同・疎（同級生）	ビデオカメラの借用（借用依頼）
6	依頼	目上（大家）	アパートの家賃の支払い延期（延期依頼）
7	依頼	同・親（友人）	貸した1万円の返却（返金依頼）
8	断り	同・疎（先輩）	教授主催の研究会の書類整理手伝いの申し出（申出断り）
9	断り	目上（教授）	教授の資料整理の人員補強の申し出（申出断り）
10	断り	同・親（友人）	ビデオカメラの借用依頼（借用断り）
11	断り	同・親（友人）	友達のクラブの演奏会のチケットの購入依頼（購入断り）
12	断り	同・疎（先輩）	学園祭のコンサートでの演奏への助力依頼（依頼断り）
13	謝り	同・親（友人）	借りた本の紛失（紛失謝り）
14	謝り	目上（教授）	借りた本の紛失（紛失謝り）
15	謝り	疎（無関係/司書）	借りた本の紛失（紛失謝り）
16	謝り	目上（教授）	寝坊して約束に遅刻（遅刻）
17	依頼	同・疎（同級生）	アルバイトの紹介（バイト依頼）
18	依頼	目上（教授）	アルバイトの紹介（バイト依頼）
19	依頼	目上（教授）	仕事の紹介（仕事依頼）
20	不満表明・苦情	同・疎（隣人）	騒音（騒音苦情）
21	不満表明・苦情	同・親（友人）	騒音（騒音苦情）
22	不満表明・不満	同・親（友人）	遅刻（遅刻苦情）
23	不満表明・不満	目上（教授）	成績評価（成績苦情）
24	不満表明・批判	目上（教授）	採点ミス（採点苦情）
25	不満表明・批判	同・疎（同級生）	道の選択の間違い（間違い苦情）

3. 結果と考察

3-1 「上下関係」と「親疎関係」

表3-1は「依頼」発話行為の「相手に労力・時間の提供を求める場面」(#1, 2, 3)で各グループに使われた主なストラテジーの使用頻度を表したものである。

依頼対象が同等の親しい相手(以下、「同親」)の場合、どのグループも【弁明】先行型のストラテジーを最も多く使用した。【弁明】先行型のストラテジーは「依頼」の理由や説明から始まるので、積極的に働きかけるストラテジーといえるだろう。

同等の親しくない相手(以下、「同疎」)と目上の相手(以下、「目上」)の場合、「台湾」と「中国」の【謝り】先行型のストラテジーの使用は50%以上であり、「日社」と「日院」よりも高い値となっている。

「日社」は、「同疎」に対しては【弁明】先行型のストラテジーを多く使用するが、「日院」は【弁明】先行型のストラテジーも【謝り】先行型のストラテジーも比較的多く使用しているので、この相手に対してはどちらのストラテジーを用いるべきか揺れがあるように思われる。「目上」に対しては、「日社」も「日院」も【配慮】先行型のストラテジーの使用が50%以上で、「台湾」および「中国」とは差がみられた。

以上をまとめると、相手に労力や時間の提供を求める場合、「台湾」と「中国」は「同疎」と「目上」に対して【謝り】先行型のストラテジーを使用することで丁寧な印象を与えようとし、「日社」と「日院」は「目上」に対して【配慮】先行型のストラテジーにより相手の状況への気遣いを見せる必要があると考えているようである。ここから、「台湾」と「中国」は「親疎関係」を、「日社」と「日院」は「上下関係」を判断基準としてストラテジーの選択をしているのではないかと考えられる。

表3-1. 主なストラテジーの使用頻度(%)

ストラテジー	【謝り】先行型			【配慮】先行型			【弁明】先行型		
	同・親	同・疎	目上	同・親	同・疎	目上	同・親	同・疎	目上
日社	2.0	26.0	9.8	9.8	10.0	52.9	58.8	54.0	27.5
日院	7.7	30.8	23.1	15.4	19.2	50.0	38.5	38.5	23.1
台湾	20.0	53.3	76.5	20.0	20.0	17.6	40.0	26.7	5.9
中国	25.8	51.7	45.5	9.7	6.9	27.3	48.4	37.9	12.1

表3-2. 主なストラテジーの使用頻度(%)

ストラテジー	【謝り】先行型			【導入】先行型			【弁明】先行型		
	同・親	同・疎	目上	同・親	同・疎	目上	同・親	同・疎	目上
日社	5.9	23.5	33.3	5.9	37.3	45.1	76.5	33.3	15.7
日院	0.0	32.0	46.2	3.8	36.0	30.8	76.9	32.0	15.4
台湾	0.0	62.5	47.1	23.5	18.8	35.3	52.9	18.8	11.8
中国	0.0	58.1	60.6	15.2	6.5	24.2	57.6	12.9	9.1

表3-2は「依頼」発話行為の「相手に金品の借用・提供を求める場面」で各グループに使われた主なストラテジーの使用頻度を表したものである（#4, 5, 6）。

「台湾」と「中国」は、「依頼内容」の種類が違う場合も使われるストラテジーの傾向に大きな変化はみられず、「依頼」の理由や説明から始まる【弁明】先行型のストラテジーを主として使う相手は「同親」で、「同疎」と「目上」に対しては【謝り】先行型のストラテジーを主に使用している。このため、「依頼内容」の違いよりもやはり「親疎関係」が大きく影響していると考えられる。しかし、「日社」と「日院」は、「同親」に対してはやはり【弁明】先行型のストラテジーを主として使用しているものの、「同疎」に対しては1つの先行型を主として使うということではなく、3つの先行型を同程度使っている。内容が金品の借用や提供といった相手の所有物に関わるものの場合、「親疎関係」がストラテジーの選択に影響するようである。

「台湾」と「中国」が「親疎関係」に敏感に反応することは、「謝り」発話行為の「本紛失の謝り場面」（#13, 14, 15）からもわかる。

表3-3からわかるように、この場面では同レベルの親しい相手に対し「なくしました」や「捜したんですが」といった【事実】先行型ストラテジーの使用頻度が高い値であった。

インタビューでは、親しい相手には「わざとじゃない」ということをわかってほしいが、それ以外の相手には謝って弁償するしかないという回答があった。もちろん相手に与える損害の程度にもよるだろうが、比較的弁償が容易なものに対しては、親しい関係にある人ならその後の行動の方が重要であり、それ以外の人に対しては信頼回復の機会を得るのが困難になるので「謝罪する」必要があると考えるのであろう。

表3-3. 主なストラテジーの使用頻度（%）

ストラテジー	【謝り】先行型			【事実】先行型		
	同・親	目上	無関係	同・親	目上	無関係
日社	57.1	42.0	74.0	32.7	40.0	24.0
日院	46.2	53.8	69.2	38.5	38.5	23.1
台湾	14.3	50.0	94.1	78.6	18.8	5.9
中国	39.3	48.4	79.3	53.6	25.8	10.3

表3-4. 主なストラテジーの使用頻度（%）

ストラテジー	【質問】先行型			【能力】先行型			【能力不足】先行型			【願望】先行型		
	同疎	目上	目上	同疎	目上	目上	同疎	目上	目上	同疎	目上	目上
内容	軽	軽	重	軽	軽	重	軽	軽	重	軽	軽	重
日社	13.8	9.4	4.6	15.4	6.3	3.1	10.8	7.8	29.2	12.3	9.4	44.6
日院	17.9	5.3	2.7	12.8	5.3	8.1	7.7	5.3	35.1	23.1	23.7	29.7
台湾	7.3	2.6	0.0	29.3	12.8	19.0	9.8	12.8	7.1	14.6	15.4	52.4
中国	8.1	5.1	4.9	19.4	8.5	18.0	6.5	10.2	9.8	14.5	22.0	45.9

表3-4は「アルバイトおよび仕事の紹介の依頼場面」(# 17, 18, 19)で「同疎」と「目上」に対して使われた各グループの主なストラテジーの使用頻度である。

「日社」と「日院」は同じ「目上」に対して、依頼内容が比較的軽い場合(アルバイト)に比べ、重要度が増す(就職)場合には、「自信はありませんが」や「できるかどうか分かりませんが」といった【能力不足】先行型や「やりたいんですが」といった【願望】先行型のストラテジーの使用が多く、自分の能力を積極的にアピールするよりはむしろ能力的には不十分かもしれないがやってみたいと願望を伝える謙遜型とでもいうべき依頼を行う人が半数以上となる。このように、行為の相手と同じ「目上」であっても内容が重い場合には謙遜型のストラテジーの使用が増えることから、「内容の軽重」もストラテジーの選択に影響すると言えるだろう。

「中国」と「台湾」では依頼内容が比較的軽い場合(アルバイト)では複数のストラテジーの使用が見られ、「同疎」に対しては【能力】先行型と【願望】先行型が比較的多く使用され、「目上」に対しては【願望】先行型の他に【能力】先行型と【能力不足】先行型の使用が同程度見られた。「目上」に就職を依頼する場合には【願望】先行型と【能力】先行型が主に使用され、【能力不足】先行型の使用も多い「日社」と「日院」と比べて積極的なストラテジーを使用する傾向がある。

台湾人被調査者へのインタビューによると、自分の能力について自信のある場合ははっきりとできるというが、あまり自信がない場合には初めから応募したりしない。ただ日本人と比べると台湾人はできることははっきり言うだろうという意見であった。一方、中国人被調査者へのインタビューによると、中国では競争が激しいので、多少できることがあれば、それを積極的にPRすることでチャンスをつかもうとする場合も多いという話であった。

「中国」と「台湾」は行為の内容が同じ場合、「同疎」と「目上」では使用するストラテジーが異なり、同じ「目上」の相手であっても行為の内容が重い場合にはより積極的なストラテジーを使用することから、「親疎関係」の次には「上下関係」が、そしてさらに「内容の軽重」がストラテジーの選択に影響すると思われる。

同時に行った調査の中で、「語学のクラス分け発表場面」でどのような行動を取るかとその理由について質問を行ったが、クラス分けに不満がある場合、中国人被調査者は50%近くが「クラス分けを行った先生と話して理由を聞く」という回答を選択し、その理由として「クラスの変更について話しに行くため」をあげている人が、すべての行動に対する理由のうちかなりの割合を占めた(約20%)。留学生の予備教育に携わる教員の中には、中国人留学生の何人かが、プレースメントテスト後に必ずといっていいほど「上のクラスに変えてほしい」と希望してくる場面を経験した人もいると思われる。その理由の多くが「上のクラスのレベルがふさわしい」、「もっと上のクラスの勉強をし

たい」といったもので、プレースメントテストの得点を見せて説得しても学生がなかなか納得せずに、対応に苦慮した教員も少なくないのではないだろうか。中国で学習機関やクラスが同じであった（学習開始が同時期であった）にもかかわらず、日本でレベルが違うクラスに振り分けられた場合など、本人の威信にも関わってくるので大変である。このような状況が頻発するわけではないが、中国人留学生が日本人よりも積極的に自己PRを行うことを示すエピソードとしては興味深いものである。

3-2 「親疎関係」と「面子」

表3-5は「依頼に対する断り」発話行為の3場面（#10, 11, 12）で使われた主なストラテジーの使用頻度であるが、「台湾」と「中国」は相手が「同親」でも「同疎」でも各場面でのストラテジーの選択に大きな違いはなかった。前節で「台湾」と「中国」は「親疎関係」に敏感に反応するとわかったが、それでは、これらの場面では何が影響しているのであろうか。

インタビューでは、実際に親しい人に「コンサートに来てほしい」といわれたら余程のことがないかぎり行くし、あまり親しくなくても自分の能力を買って助力を頼んできた場合には（もしそれが知り合いからの紹介ならなおさら）、特に理由がなければ引き受けると答えた人もいた。邱（1993）ら多くの人が中国社会では人間関係を中心として全てが決まると指摘し、また波頭（1994）は「中国人は、自分に対する信頼には必ず報いようとする。自分を信頼してくれた相手に失敗させてしまったら、逆に自分の面子が潰れてしまうからだ。」とも述べている。これらのことから、これらの場面では、人間関係に重要な「面子」が「親疎関係」よりも重視されるという背景がストラテジーの選択に影響したのではないかと考えられる。

表3-5. 主なストラテジーの使用頻度（%）

ストラテジー	【謝り】先行型			【配慮】先行型			【弁明】先行型		
	同・親		同・疎	同・親		同・疎	同・親		同・疎
人間関係	同・親		同・疎	同・親		同・疎	同・親		同・疎
依頼内容	借用	購入	出演	借用	購入	出演	借用	購入	出演
日社	63.3	51.0	39.2	2.0	3.9	7.8	30.6	37.3	51.0
日院	80.0	50.0	42.3	4.0	23.1	0.0	16.0	26.9	46.2
台湾	43.8	41.2	35.3	0.0	23.5	11.8	56.3	35.3	41.2
中国	40.6	40.6	30.3	9.4	28.1	27.3	43.8	31.3	39.4

「面子」の重視は、「依頼」発話行為における「同親」に対する「返金の依頼」場面（#7）でもみられる（表3-6）。

この場面では意図を明確に表現しない「曖昧」な表現が「台湾」と「中国」に目立つ。どのグループにとっても「返金の催促」は容易ではないと思われるが、特に「中国」は

「曖昧」な表現によるストラテジーの使用頻度が40%以上あったので、「返金の催促」に対する抵抗がきわめて強いのではないかと考えられる。

インタビューでは、「相手を信頼してお金を貸したのに催促したら相手を信頼していない事になり、相手の面子を傷つけてしまう」という答えが特に中国人被調査者に多かった。「面子」という言葉は広い範囲で使われ、「権限」、「名声」、「名誉」などを包括する概念と考えられ、定義を明確に示すことは難しいが、これらの場面では、「面子」の中でも「自分(の力)に対する相手の信頼や期待」に応えるという「威信」が問題になったのだと思われる。

この他にも「面子」が重視された場面がある。

「申し出に対する断り」発話行為は相手の好意的な働きかけを拒否する結果となり、「断り」発話行為の中でも両者の平衡な状態を失わないようにするのは非常に難しいものである。そのため、どの相手に対しても相手への印象をなるべくよくしようという調節機能を持つ発話類型が先行するのではないかと推測された。

表3-6.【依頼表現】の発話類型の使用頻度(%)

発話類型	【全依頼】	【曖昧】	【間接的依頼】	【願望】
日社	100.0	0.0	58.8	31.4
日院	84.6	19.2	38.5	15.4
台湾	66.7	33.3	53.3	6.7
中国	80.6	42.3	34.6	11.5

表3-7からわかるように、調査結果では、どのグループも「同疎」からの助力の申し出に対しては【感謝】先行型の使用頻度が高かったが(#8)、「目上」からの申し出に対しては「断り」を表明する【結論】先行型のストラテジーの使用頻度の方が高かった(#9)。

ただし、表3-8からわかるように、「同疎」の場合も「目上」の場合も、「台湾」と「中国」の【結論】先行型のストラテジーの【結論】の内容に「いいです」という直接的な断り表現が多くみられる。インタビューによると「申し出」に対する中国語での「断り」表現は「不用了(その必要はない)」一つであり、敬度や丁寧さは態度で表すという。ま

表3-7. 主なストラテジーの使用頻度(%)

ストラテジー	【感謝】先行型		【弁明】先行型		【結論】先行型	
	同・疎	目上	同・疎	目上	同・疎	目上
日社	74.5	15.7	5.9	27.5	17.6	45.1
日院	53.8	3.8	26.9	30.8	19.2	53.8
台湾	53.3	5.9	0.0	11.8	46.7	76.5
中国	59.3	9.1	3.7	24.2	37.0	54.5

た、留学生に【結論】先行型のストラテジーが多かったことに関しては、まず「申し出」を受けるのか断るのかをはっきりさせるべきだという意見であった。

この場合、「申し出」の内容を相手の厚意と受け取るのではなく、いったん仕事を頼まれた自分の領域への侵害だと考えれば、直接的な表現ではっきり否定するのは自然な反応であろう。したがって、「台湾」と「中国」は「親疎関係」よりも自分と相手の権利や領域、つまり「面子」の中でも「権限」に敏感に反応するのではと考えられる。

このことは「依頼」発話行為の「家賃支払い延期の依頼」場面（#6）の結果からも示唆された。

表3-8.【結論】先行型の内容別使用頻度（%）

内容	いい(結構)です	だいたい(結構)です	いい(結構)です	だいたい(結構)です
人間関係	同・疎		目上	
日社	5.9	11.8	9.8	35.3
日院	7.7	11.5	19.2	34.6
台湾	26.7	20.0	41.2	35.3
中国	37.0	0.0	39.4	15.2

表3-9からわかるように、「台湾」と「中国」の回答に「日社」と「日院」にはほとんど見られない【許可】の発話類型を使ったストラテジーも多く使われた。インタビューでは「払うべきものが払えない」のに「(待って)とお願いする」権限はないし、延期させるか否かは相手が決めることなので許可を得るべきではないか、という意見があった。この場面では相手の権利あるいは相手の領域への侵害、つまり「権限」に対する配慮が無意識のうちに影響していたのではと推測された。

「依頼」発話行為と「断り」発話行為で「台湾」と「中国」は権利や領域に敏感に反応することがわかったが、これは相手や自分の立場に対する明確な意識がなければできないことである。これにより、「謝り」発話行為の「遅刻」場面（#16）での「中国」の【弁明】の使用頻度の高さを説明できるのではないかと思われる。

表3-10からわかるようにこの場面での「中国」の【弁明】は本当の理由の「寝坊」であった。このため、彼らは母国でも同様のストラテジーを使うのではないかと推測して

表3-9.【間接的依頼】と【許可】の発話類型の使用頻度（%）

発話類型	【間接的依頼】	【許可】
人間関係	目上	目上
日社	78.4	9.8
日院	69.2	15.4
台湾	35.3	47.1
中国	30.3	45.5

表3-10.【弁明】発話類型の使用頻度（%）

発話類型	【弁明】	【弁明】(寝坊)
人間関係	目上	目上
日社	31.4	21.6
日院	15.4	15.4
台湾	37.5	25.0
中国	50.0	50.0

いたが、インタビューによれば、母国では「寝坊」を理由とすることは恥ずかしくてできないが、ただ理由は必要なので、自分以外の原因による申し開きを必ず行うということであった。相手との関係が均衡が崩れそうな場合には関係を修復するために必ず理由が求められ、日本的に誠意を持って謝るだけでは済まないということなのであろう。これに比べ、日本の大学では時間通りに授業が始まることはあまりなく、教師自らが「寝坊した」と言うこともあることから、日本は「遅刻」に対して厳しくないといった印象をもっている人が多いようである。そのため、必ず理由を言う必要があると考える彼らが「寝坊」に言及するという結果をもたらしたのであろう。

3-3 「上下・親疎関係」と「ウチ・ソト」

次に、各発話行為で得られたデータを発話スタイルの丁寧度を分析基準として、被調査者各グループがどのような要因により発話スタイルを選択しているかについて考察を行う。

表3-11は調査AおよびBの設問で「目上」を発話相手とした8場面（#3, 6, 9, 14, 18, 19, 23, 24）の「丁寧体」の使用頻度である。

この表からわかるように、被調査者グループのすべてで、「丁寧体」が使用されている。ここから、発話行為の種類および内容の軽重にかかわらず、「目上」の相手に対しては常にすべてのグループが「丁寧体」を使用するということが明らかである。

次に、同等の親しい相手に対してどのような発話スタイルが使われているのかをしてみる。

表3-11. 「目上」に対する「丁寧体」の使用頻度（%）

No.	3	6	9	14	18	19	23	24
内容	推薦依頼	延期依頼	申出断り	紛失謝り	バイト依頼	仕事依頼	成績苦情	採点苦情
日社	100.0	100.0	100.0	100.0	95.3	100.0	96.8	100.0
日院	100.0	100.0	96.2	100.0	100.0	100.0	94.6	100.0
台湾	100.0	100.0	100.0	93.8	89.7	95.2	88.1	88.1
中国	100.0	97.0	100.0	96.8	94.9	91.8	74.1	93.5

表3-12. 「同等の親しい相手」に対する「普通体」の使用頻度（%）

No.	1	4	7	10	11	13	21	22
内容	添削依頼	購入依頼	返金依頼	借用断り	購入断り	紛失謝り	遅刻苦情	騒音苦情
日社	94.1	84.3	98.0	91.8	90.2	85.7	98.5	93.7
日院	92.3	92.3	100.0	100.0	100.0	96.2	100.0	100.0
台湾	26.7	41.2	40.0	43.8	52.9	14.3	83.3	69.0
中国	45.2	39.4	46.2	25.0	50.0	46.4	77.4	75.8

表3-12は「同親」を発話相手とした8場面（#1, 4, 7, 10, 11, 13, 21, 22）の「普通体」の使用頻度である。

「日社」と「日院」はいずれも、発話行為の種類および内容の軽重にかかわらず、「同親」の相手に対しては常にすべてのグループが「普通体」を使用している。これらの場面のうち、「返金依頼」と「紛失謝り」という心的抵抗が高い場面でも「同親」に対しては「普通体」の使用頻度がほぼ100%である。特に、「紛失謝り」場面での相手に借りた本を紛失するという内容は、相手に被害を与えることとなり、対応の仕方によっては相手との関係修復を不可能にする危険性を持つ発話行為である。このように相手との人間関係の均衡を崩しかねない場面でも「同親」に「普通体」が使用されるのは、日本語における「普通体」の使用が相手との心的距離を縮めるという機能を持っているからであり、「普通体」の使用が必ずしも相手への配慮にかけた粗野な表現となるわけではないということがわかる。井出（1992, 1995）でも論じられているように、「です・ます」は発話が行われている場面に対する話し手の認識を示しており、場面のあらたまりの度合、話し手と聞き手の関係等、コンテクストそのものに対する話し手の認識を示していると考えられる。したがって、日本語では「同親」に対してはどの場面でも「普通体」が使用されるという結果は、「普通体」の使用でも十分にポライトネス注1)に配慮した発話が可能であるということを示している。

一方、中国人・台湾人留学生は「不満表明行為」である「苦情」場面（#21, 22）を除き、「普通体」の使用頻度が低かった。同じ相手に対しても発話行為の種類や内容の軽重により発話スタイルの選択に相違が見られることから、相手の相違だけで発話スタイルを使い分けているわけではないと推測される。

一般に、日本語は上下関係で語形式を変化させる敬語を用いたり、相手との関係で文体を変えて丁寧度を高めて表現する点で特徴的な言語だといわれている。一方、馬場・盧（1992）によると中国語には文体の区別はなく、社会的地位の高い人に何かを依頼する時には、「意見」を「高見」に、「看（見る）」を「過目」というように語彙を一段高いレベルの丁寧語に置き換えることで丁寧な表現が可能になるとされるが、留学生によれば動詞を変えずに人称代名詞を一段高いレベルにするだけでも十分だという話であった。鈴木（1989）は、「通常、日本語の学習者は誤解や摩擦を避けるための安全策として、目上に対しては敬語を用い、家族や友人以外には『です・ます』を使って話すように指導される」と述べているが、学習者にとって敬語使用は非常な難題であり、一般的には誰に対しても「です・ます」を使用するのが無難だと勧められることが多いだろう。しかし、表3-12の考察結果では「中国」と「台湾」の「同親」に対する発話スタイルの選択に一貫性が見られないことから、彼等が日本人と同様に適切な場面で「普通体」と「丁寧体」を使い分けることは難しく、その選択も「日社」と「日院」のそれとは異なる

基準で行っているのではないかと思われる。

では、同等で疎遠な相手の場合はどうであろうか。

表3-13は「同疎」を発話相手とした7場面（#2, 5, 8, 12, 16, 20, 25）の「丁寧体」の使用頻度である。

「中国」と「台湾」は、「同疎」の相手に対しては発話行為の種類や内容の軽重にかかわらず、「丁寧体」を選択していることがわかる。これまでの分析結果をみると、「中国」と「台湾」とも「目上」と「同疎」の相手に対しては「丁寧体」を選択しているが、「同親」の相手に対しては「普通体」と「丁寧体」の選択に一貫性がみられない。以上から、「中国」と「台湾」は、まず「親疎関係」を優先して発話スタイルを選択していることがわかる。

一方、「日社」と「日院」は「同疎」の相手に対して「普通体」と「丁寧体」の選択に一貫性がみられないが、これには発話行為の種類や内容の軽重が発話スタイルの選択に影響しているのではないかと推測される。

表3-13. 「同等の疎遠な相手」に対する「丁寧体」の使用頻度（%）

No.	2	5	8	12	16	20	25
内容	助力依頼	借用依頼	申出断り	依頼断り	バイト依頼	騒音苦情	間違い苦情
日社	36.0	58.8	98.0	64.7	29.2	98.5	32.3
日院	57.7	80.0	100.0	96.2	20.5	100.0	15.4
台湾	86.7	100.0	93.3	58.8	75.6	92.9	61.9
中国	82.8	90.3	100.0	66.7	74.2	96.8	74.2

さて、ここまでの分析結果から、明らかにすべき課題として次の二点が浮かび上がってくる。1つは「日社」と「日院」が「同疎」の相手に対して発話スタイルを選択する場合、何を基準としているかであり、もう1つは「中国」と「台湾」が「同親」の相手に対して発話スタイルを選択する場合、何を基準としているのかという疑問である。ここからは、この二点を明らかにすべく考察を行う。

まず、「中国」と「台湾」の「同親」の相手に対する発話スタイルに関する調査結果について見てみよう。表3-12から「中国」と「台湾」の調査結果だけを抜き出したものが表3-14である。

表3-14. 「同等の親しい相手」に対する「普通体」の使用頻度（%）

No.	1	4	7	10	11	13	21	22
内容	添削依頼	購入依頼	返金依頼	借用断り	購入断り	紛失謝り	遅刻苦情	騒音苦情
台湾	26.7	41.2	40.0	43.8	52.9	14.3	83.3	69.0
中国	45.2	39.4	46.2	25.0	50.0	46.4	77.4	75.8

これら8場面の中で、「騒音苦情」と「遅刻苦情」場面では「普通体」の使用頻度が明らかに高い。これら2つの場面では、調査対象となっている話し手は、相手である聞き手から「騒音」と「遅刻」という迷惑を既に受けている状況での会話を求められており、人間関係の均衡を崩した原因となっているのは聞き手である相手である。したがって、発話を行う際には、聞き手にこそ相手との均衡を取り戻すための方策を考える必要が生じるわけで、話し手には特に方策を講じる必要は生じない。だが、これら以外の場面では、「依頼」場面（#1, 4, 7）では聞き手に自分の用件を頼むという行為により、「断り」場面（#10, 11）では結果として相手の依頼を拒否することにより、そして「紛失謝り」場面では借りていた聞き手の本をなくしてしまったという行為により、調査対象となっている話し手自身が聞き手との人間関係の均衡を崩す原因となっている。したがって、相手との関係ではなく行為の内容が、被調査者に気軽な発話スタイルの使用をためらわせたのだらうとの判断が可能となる。つまり、これらの場面ではいずれも話し手が相手との関係のバランスを崩したことに心的負担を感じているはずで、発話行為の目的を成し遂げるためにはそのバランスを均衡な状態に戻し、相手に受け入れてもらえるような戦略を考えなくてはならないわけである。したがって、これらの場面で「中国」と「台湾」の「丁寧体」の使用頻度が「日社」と「日院」のそれに比して高いのは、彼等の「丁寧体」選択が人間関係の均衡を取り戻すための補償作用を意図して行われた可能性があるからだと考えられる。

次に、「日社」と「日院」の「同疎」の相手に対する発話スタイルに関する調査結果について考察する。表3-13から「日社」と「日院」の「同疎」の相手に対する発話スタイルを抜き出し、「無関係な疎の相手」に対する「紛失謝り」場面（#15）を加えたものが表3-15である。

これらの場面のうち、明らかに「丁寧体」の使用頻度が高い相手は「同疎」の相手の中でも先輩や隣人であり、無関係な疎の相手である図書館司書である。

一般に日本人が同等の親しい相手に対して「丁寧体」を使用するのは喧嘩をしているときの嫌み表現や相手を皮肉る場合に他ならず、改まった場面での第三者を交えた会話場面以外では文字どおりの丁寧さを表すことはない。日本語で使われる「丁寧体」は心的距離がある相手に対して礼節ある態度を示す働きを持つものなので、疎遠な相手に対

表3-15. 「同等の疎遠な相手」に対する「丁寧体」の使用頻度（%）

No.	2	5	16	24	8	12	20	15
内容	助力依頼	借用依頼	バイト依頼	間違い苦情	申出断り	依頼断り	騒音苦情	紛失謝り
属性	同級生	同級生	同級生	同級生	先輩	先輩	隣人	司書
日社	36.0	58.8	29.2	32.3	98.0	64.7	98.5	100.0
日院	57.7	80.0	20.5	15.4	100.0	96.2	100.0	100.0

する「断り」と「苦情」は、相手との人間関係の均衡を崩しかねない発話行為であり、その危険を最小限のものとするために「丁寧体」を使用することで相手への配慮を示そうとしたのであろう。同様に、「謝り」は相手との関係修復を行うための発話行為であるため、疎遠な相手に対する場合には「丁寧体」を使用することで相手への配慮を示すことが必要なのであろう。

その一方、同級生に対する発話スタイルの選択は場面によって異なり、「日社」は「助力依頼」、「バイト依頼」、「間違い苦情」の3場面で、「日院」は「バイト依頼」と「間違い苦情」の2場面で、「丁寧体」の使用頻度が低かった。言い換えると、これらの場面では「普通体」の使用頻度のほうが高いということになる。「日社」と「日院」に共通して「丁寧体」の使用頻度が高いのは「借用依頼」場面においてであり、反対に「普通体」の使用頻度が高いのは「バイト依頼」場面と「間違い苦情」場面においてである。一般に依頼という行為自体は相手に負担をかける性質の行為であり、特に前者の「借用依頼」場面は貴重品であるビデオカメラの借用が目的であるため、疎遠な相手であればなおさら丁寧をお願いする必要があると判断するのであろう。しかしながら、後者の「バイト依頼」場面の場合は行為の主体からの一方的な働きかけによるものではなく、アルバイトを探している相手に応えて依頼するという行為であることから、相手に負担をかけることへの配慮はさほど行なう必要がない。それよりもむしろ、相手の警戒を解き、情報を引き出しやすくする意図から、「同親」の相手に対すると同様に「内グループ」のメンバーとして扱い、相手との心的距離を縮めるために「普通体」を使用すると考えたほうが妥当なのではあるまいか。このように考えると、「間違い苦情」場面は同級生と卒業記念パーティーの会場に一緒に行くという状況なので、相手を共通の目的で行動する仲間ととらえた場合には、同級生である相手を「内グループ」のメンバーと認識することが可能となる。つまり、仲間であるという関係をお互いが認識した方が行為が進めやすい場合には、あまり親しくない相手であっても、「ウチ」として認識することになり、「同親」の相手に対する場合と同様に「普通体」を使用する状況が成立するわけである。

日本語における「普通体」の使用が、相手との心的距離を縮めるという機能を持っていることはすでに述べたとおりである。一般に、会社で働く社会人の場合は、大学生とは違って当事者同士に年齢差がある場合も多く、「同疎」を「ウチ」と認識できる状況で「丁寧体」を使用することが必ずしも相手との間に心的距離をもたらすことになるとは限らないだろう。だが、大学生同士の場合は、年齢差がさほどないにもかかわらず、「同疎」を「ウチ」と認識できる状況で「丁寧体」を使用した場合、相手との間に心的距離をもたらし、他人行儀な印象を与えることになるものと思われる。したがって、「同疎」に対する「バイト依頼」場面での「丁寧体」の使用は、相手との間に心的距離をもたらし、相手を身構えさせることになりかねないし、同様に「間違い苦情」場面での「丁寧体」

の使用も、相手との間に心的距離をもたらし、反対意見の表明という行為を深刻なものにしかねない。このような事態を避け、「バイト依頼」場面では相手の警戒心を解き、気軽に応えてもらうために、また「間違い苦情」場面では自分の反対意見の表明を深刻なものにせず、相手が受け入れやすいものとするために、相手との心的距離を縮め相手の共感を得やすくするための方策が必要となる。すなわち、これらの場面はいずれも自分の働きかけにより相手との人間関係の均衡が崩れる危険性があるので、それを避けるために話し手は「普通体」を使用することで相手との心的距離を縮めて、人間関係の均衡を維持しようとするのではないだろうか。したがって、「同疎」に対するこれらの場面での「日社」と「日院」の「普通体」の使用は、人間関係の均衡を維持するための補償作用という働きを持っていると考えることができよう。

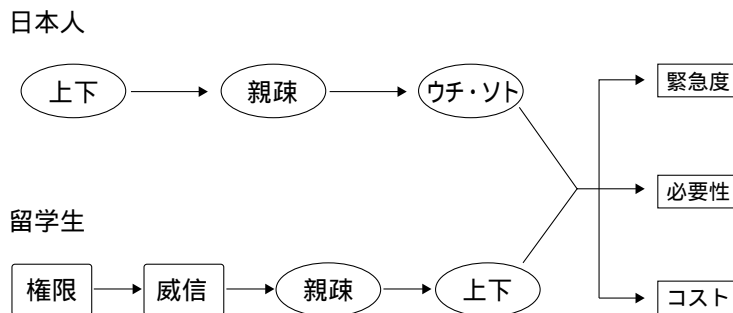
以上から、疎遠な相手は状況次第で「内グループ」のメンバーに認識されることがあると思われ、したがって、日本人グループの発話スタイルの選択には「ウチ・ソト」という要因が影響するのではないかと推測される。

3-4 まとめ

人が相手に言葉で意思表示をする場合、まず頭の中で何を言うかを決定し、次にそれをどのように表現するかを考える。つまり、内容（発話類型）、その並べ方（ストラテジー）、その表現形式（発話スタイル）という過程を経て発話に至ると考えられる。そこで、この過程を念頭に分析結果をまとめてみよう（図1）。

「中国」と「台湾」は、基本的には、まず「権限」と「威信」という自分の領域にかかわる事柄かどうか重要な判断基準となり、次いで互いの心的距離を表す「親疎関係」と年齢や立場の違いを表す「上下関係」という人間関係が配慮され、さらに事柄の内容の「緊急度・必要性・コスト」を考慮して、ストラテジーと発話スタイルの選択を行なっている。とはいえ、話し手自身の働きかけが原因で聞き手との関係が不均衡な状態に

図1. ストラテジーの選択に影響する社会文化的要因



なる場合には、たとえ同等の親しい相手であってもより丁寧な発話スタイルを選択することで相手との均衡を取り戻そうとするものと考えられる。

他方、「日社」と「日院」は、基本的には、年齢や立場の違いを表す「上下関係」と心的距離を表す「親疎関係」という人間関係が優先的に配慮され、次に同じグループ内に属するか否かを表す「ウチ・ソト」が判断基準になり、さらに事柄の内容の「緊急度・必要性・コスト」を考慮して、ストラテジーと発話スタイルの選択を行う。この「ウチ・ソト」は発話スタイルを決定する重要な要因であるため、特に同等だが疎遠な相手に対して自分の働きかけが原因で相手との関係に不均衡をもたらす場合には、相手を「ウチ」のメンバーとして心的距離を縮めるために、同等の親しい相手にするように発話スタイルを「普通体」にすることで相手との均衡を取り戻そうとする。つまり、自分の働きかけが原因で相手との関係に不均衡をもたらす危険性がある場合に、疎遠な相手を同じクラスや学校といった同じ集団に所属する「ウチ」のメンバーと考えることが可能かどうかが発話スタイルを決定する重要な要因になるものと考えられる。

4. おわりに

留学生に対する日本語授業を実施するにあたって、日本語コースのカリキュラムを改善するだけにとどまらず、教師自身が個々の留学生の学習歴や背景を考慮に入れつつ授業を実施することも必須の要件となろう。山口(2002)が報告しているように、ストラテジーの選択に影響する「親疎」や「上下」といった要因の優先順位が母語と対象言語で異なる場合、学習歴1~2年次に母語の干渉が強く現れ、また対象言語に特有の言語表現が同義でかつ多様な表現形式を持つ場合、その使い分けの認識には時間を要する。また、上級レベルの留学生の日本語表現には統語的な誤用が少なくなくても、語用論的には適切ではない場合があり、滞日期間が短く、実生活での日本語使用経験が浅いほど母語や母国文化の干渉を受けやすい。さらに、たとえ日本語や日本文化に関する専門知識を有する場合であっても、母国文化での言語行動や言語スタイルの影響は強く残り、また、学習環境が言語スタイルに影響を及ぼすことも明らかである。したがって、教師自身が学習者である留学生を評価し、学習促進のための助言を行う際には、現在の学習状況に加え、彼等のそれまでの学習状況の把握に努め、それをいかにすることができれば、学習上の問題点の解決に役立つ筈である。

今後益々多様な留学生受け入れプログラムが実施され、その受け皿となる大学の基盤整備が必要とされる中、留学生プログラムを成功させるためには留学生担当教員や職員との質の向上、あるいはプログラムの改善といった事柄だけでなく、共に学ぶ日本人学生に異文化理解教育や国際理解教育を行い、彼等の異文化受容能力を高める必要もある。

ハウエル(1982)は、コミュニケーションを真に意義のあるものにするためには会話に当事者が積極的に参加する意志があり、言葉の絶えまない交換を通して共通の意味体系を構築することが必要だとして、これを「コミュニケーションのジョイント・ベンチャー」と呼んでいる。これにはお互いにひとりの人間として対等な関係であることが前提となる(ハウエル・久米 1992)。コミュニケーションは自分と相手との間で協力して作り上げるものであり、どちらか一方が過度の負担を強いられた状態ではうまくいくはずがない。したがって、双方が協力して作り上げるジョイント・ベンチャーであるコミュニケーションを真に意義のあるものとするためには、留学生だけにエンパワーメントを求めるのではなく、日本人スタッフや日本人学生もマインドフルになり、自文化の枠から脱皮することが重要であると思われる。

注

本稿は名古屋大学大学院国際開発研究科に提出した博士論文(2002)の1部をまとめ直したものである。

注1) 井出(1995)はポライトネスを「円滑なコミュニケーションのために話し手が相手に示す心配り」と定義し、狭い意味での日本語の敬語使用のみに相当する用語ではなく、日本人に共有される常識を反映した「丁寧な言語使用」すべてを含むものとした。

参考文献

- 馬場俊臣・盧春蓮 1992 日中依頼表現の比較対照 北海道教育大学紀要：第1部A, 43(1), 57 - 66 .
- Beebe, L.M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. 1990 Pragmatic transfer in EFL refusals. In R.C. Scarcella, E.S. Andersen, and S.D. Krashen, (Eds.), *Developing communicative competence in a second language*. New York: Newbury House. pp. 55-73.
- ハウエル, W.S.・久米昭元 1992 『感性のコミュニケーション 対人融和のダイナミズムを探る』大修館書店
- Howell, W.S. 1982 *The Empathic Communicator*, Belmont, CA: Wadsworth
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子 1996 不満表明ストラテジーの使用傾向 日本語母語話者と日本語学習者の比較 日本語教育, 88, 125 - 139 .
- 波頭亮 1994 『最後の巨大市場・中国』PHP研究所
- 生駒知子・志村明彦 1993 英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：「断り」という発話行為について 日本語教育, 79, 41 - 52 .
- 井出祥子 1992 日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用 言語, 21(12), 42 - 53 .
- 井出祥子 1995 誤用論から見た敬語 わきまを指標するモダリティ表現としての丁寧語 国文学, 43(14), 10 - 17 .

邱永漢 1993 『中国人と日本人』 中央公論社

Olshtain, E., & Weinbach, L. 1993 Interlanguage features of the speech act of complaining. In G. Kasper and S. Blum-Kulka, (Eds.), *Interlanguage Pragmatics*, New York, NY: Oxford University Press. pp. 108–122.

鈴木睦 1989 聞き手の私的領域と丁寧表現 日本語の丁寧さは如何にして成り立つか 日本語学, 8, 58 - 67 .

山口和代 2002 日本語習得における人間関係の認知と文化的要因に関する考察 中国人および台湾人留学生を対象として 名古屋大学大学院国際開発研究科博士論文